



2009～10 年度  
国際ロータリー会長

ジョン・ケニー

# Weekly Report Niigata



2009～10 年度  
新潟ロータリー会長

小林 敬直



ロータリーの未来は  
あなたの手の中に

2009～2010 年度 国際ロータリーのテーマ

新潟 RC 2 月第 1 例会 (2010.2.2) No.2834

- (1) 「君が代」 斉唱  
ロータリーソング「奉仕の理想」 斉唱

- (2) 小林 敬直会長挨拶

## 節 分

冬から春への折り返し目として、二十四節気の一つ立春の前日を節分として一年のしめくくりをする行事が行われている。

節分の夜、豆撒きをする。豆まきの風習は、日本では室町時代に始まったもので、中国から伝わった追儺の儀式に由来すると思われる。追儺は「鬼やらい」ともいい、疫病や災害を追い払う行事で、中国では紀元前三世紀の秦の時代にもうすでに行われていた。疫病や陰気、災害は鬼にたとえられ、鬼を桃の弓や葦の矢、また戈と盾とで追い出すことであった。

遣唐使によってもたらされた追儺の風習は、文武天皇の慶雲三(七〇六)年疫病が流行して百姓が多数死んだので、鬼やらいを行ったことが知られている。その後民間でも次第に行われるようになって、文徳天皇(八五〇年代)の頃より行事化したという。

豆をまくことにはどんな意味があるのだろうか。むかし鞍馬の奥に、人々を苦しめる鬼が住んでいた。あるとき毘沙門天が現れて七人の賢者を呼び、三石三斗(約六〇〇リットル)の大豆で鬼の目を打てと命じたという話が伝わっている。鬼の目を打つのでまめ(魔目)という。また、魔滅に通じるからだともいう。豆を炒るのはなぜでしょうか、むかし佐渡ヶ島に、人民に害を与える鬼が住んでいた。神様が鬼退治にやってきて鬼と賭けをした。「今夜のうちに金北山に百段の石段を作ることができれば鬼の勝ちにしよう」鬼は夜更けのうちに九九段まで石段を築いてしまったので、神様は一計を案じて鶏の鳴き真似をすると、鶏たちは一斉に「東天紅」と声をはりあげた。鬼は朝になったと思い神様に降参したが、百段にもう一段というところで負けたことをくやしがつて「豆の芽のころにまた来るぞ」と言って退散した。神様は豆の芽が出ないように、人民に豆を炒ることを命じたという。豆まきの豆は福豆といい、節分の夜、年より一つ多く食べる。翌日の立春で一年を重ねるので、来年の分も、というわけである。節分の夜、豆まきをする。この習慣はいま紹介したいくつかの説話にあるような信仰が次第に定着したものであるが、

冬の寒気や陰気を払い、新しい明るい春の陽気を迎える年迎への行事と考えることができよう。そして新たな年は病や災いにおかされることなく豊かな年になるようにとの願いが、鬼退治につながったものといえるだろう。節分の夜、焼臭がしや 柗を戸口にさして魔除けにする風習もある。

虎杖と篠竹を音をたてて燃やして、その火で鯛を焼き、柗の枝にさして戸口に張りつける。柗には棘があり、さわるとひいらぐ(疼く)のでその名がある。鬼の目突きといい、棘で鬼の目を刺す行事が行われるところもある。また柗は六、七〇年経つと葉のギザギザが消え、年輪を積むと棘がなくなるので、縁起よい木とされている。鯛は和製の国字で、冬の象徴である。聞鼻という鬼は女子供をとって食べるが、鯛の煙がきらいだという。鯛の煙と柗、冬のシンボルをもって、寒い冬、人々をなやます疫病を追放する呪法であろう。

歌舞伎三人吉三の中に、節分の厄落としの台詞がある。「おん厄払いましよ、厄落とし。あゝら、めでたいな、めでたいな、ほんに今夜は節分か、西の海より川の中、落ちた夜鷹は厄落とし、豆沢山に一文の、銭と違って金包み、こいつあ春から縁起がいいわえ」

- (3) 一年交換学生 ステファノ君挨拶・お小遣い伝達

- (4) 幹事報告(石井 和弘幹事)

2010～11 年度 R 手帳の注文を受付けております。ご希望の方は 2 月 20 日までに事務局へお申込願います。

(5) 創立70周年記念式典について

2月9日の例会予定 会員スピーチ

新潟大学人文学部准教授 高橋 秀樹 君

ホームページを更新致しました!

新潟ロータリークラブ ホームページアドレス

<http://www.niigataarc.jp/>

\*新潟ロータリークラブ創立70周年記念式典\*

2010年4月23日(金)